

唐津街道（赤間宿と原町）からのまちづくりのご報告／第2回 都市計画サロンのご報告

1. 唐津街道（赤間宿と原町）からのまちづくりのご報告

2014年、8月31日（日）～9月1日（月）、宗像市のグローバルアリーナにおいて、日本建築学会九州支部都市計画委員会主催夏季セミナー「唐津街道（赤間宿と原町）からのまちづくり」が開催されました。宗像市は、2003年に旧宗像市と旧玄海町が、2005年には旧大島村が合併して現在に至っています。宗像市は宗像大社を中心にした古い歴史・文化を持ち、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録の取り組みが進んでいます。江戸時代には参勤交代のため整備された唐津街道が栄えました。昭和40年代以降は、福岡市と北九州市という2つの大都市の中間に位置し、住宅都市として発展してきました。最近の地方の市町村計画は、少子高齢化に伴い、複数の都市による集約的なネットワークの形成と各地域の役割分担・協働が課題となっています。宗像市は、豊かな自然や文化に恵まれ、2つの大都市圏の間にあって、居住ゾーンと共に歴史・文化ゾーンとしての役割が求められているといえるでしょう。そうした背景のなかで、かつての宿場町を現代の文脈のなかで捉えなおし、歴史と文化のまちを再興することをテーマに、講演、見学、懇親会、ワークショップ、発表会が行われました。今年度は、福岡大学・黒瀬研究室が当番校として企画および実施を担当し、熊本高専、福岡大、西日本工大、大分大、九州産業大、九州大、崇城大、久留米工大から教員・学生合わせて89名が参加しました。ワークショップでは、10チームに分かれてユニークな提案が発表され、福大B、熊本高専、九大B、熊大+崇城大の各チームの案が表彰されました。セミナー開催にあたっては、谷井市長をはじめとする宗像市の皆様方に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。（文責：黒瀬重幸（福岡大学））



写真1 唐津街道・原町付近の見学風景

2. 第2回 都市計画サロンのご報告

演題：災害時の避難シミュレーションの最前線

～シミュレーションの課題と対応～

日時：平成26年10月17日（金）

講師：末松 孝司 氏（株式会社ベクトル総研 代表取締役）

今後予想される大震災の被害軽減のためのソフト対策をとるうえで有効な検討手段として、避難シミュレーション技術の最前線の動向、特に各種シミュレーションモデルによる結果の妥当性や信頼性を担保するための検証活動について実務と研究を行っている立場からご紹介いただきました。今回は、不特定多数の人の動きをとらえる群集シミュレーションの中でも、地域防災計画支援のための避難シミュレーションを中心としてご講演いただきました。

避難シミュレーションは津波、火災、土石流などの災害・緊急時の人の属性、被災状況、情報等によって影響される群集の挙動を再現して、発災後の状況や避難に関する様々な条件などを検討するための手法、ツールである、とのことでした。その活用メリットは、手計算では難しい複合要因を統合した再現が可能であること、避難者数等を変えたケース毎の相対比較や瞬間的な状況を効率的・視覚的に把握でき、関係者の共通認識を促進することが挙げられました。ただしシミュレーションは実現像を完璧に表現するツールではなく、略式化して表現するものであることから、シミュレーションを受け取る側の課題も指摘されました。明確な検討目的に合致した要素設定と入力データ精度に対する認識の重要性が述べられました。

（文責：幹事 永村景子（九州大学））



第2回都市計画サロン会場風景